

三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ

1995・3

大分県下毛郡
三光村教育委員会

例 言

1. 本書は、三光村教育委員会が国庫と県費の補助を得て平成6年度に実施した、三光地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。
2. 各調査の実施にあたっては、大分県教育庁文化課、三光村建設課、土地所有者の御協力を得た。
3. 現地では、調査指導員のほかに深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）、大分県文化課諸氏の御指導、御助言を得た。
4. 本書の編集及び執筆は、植田が行った。

目 次

第1章	はじめに	1
第2章	調査の概要	
	(1) 祭祀遺構	4
	(2) 近世墓	7

挿 図 目 次

第1図	三光村内遺跡分布図	2
第2図	調査地位置図	3
第3図	SK1平・断面図	4
第4図	SK1出土土器(1)	5
第5図	〃 (2)	6
第6図	近世墓位置図	7
第7図	近世墓 正・側面図(1)	8
第8図	〃 (2)	9

表 目 次

第1表	SK1出土土器観察表	6
第2表	墓石銘文一覧表	9

写 真 図 版

成恒遺跡全景・発掘風景・SK1土器出土状況	10
近世墓全景・1号墓・2号墓	11
3号墓・5号墓・7号墓	12
8号墓・9号墓・10号墓	13
11号墓・13号墓	14

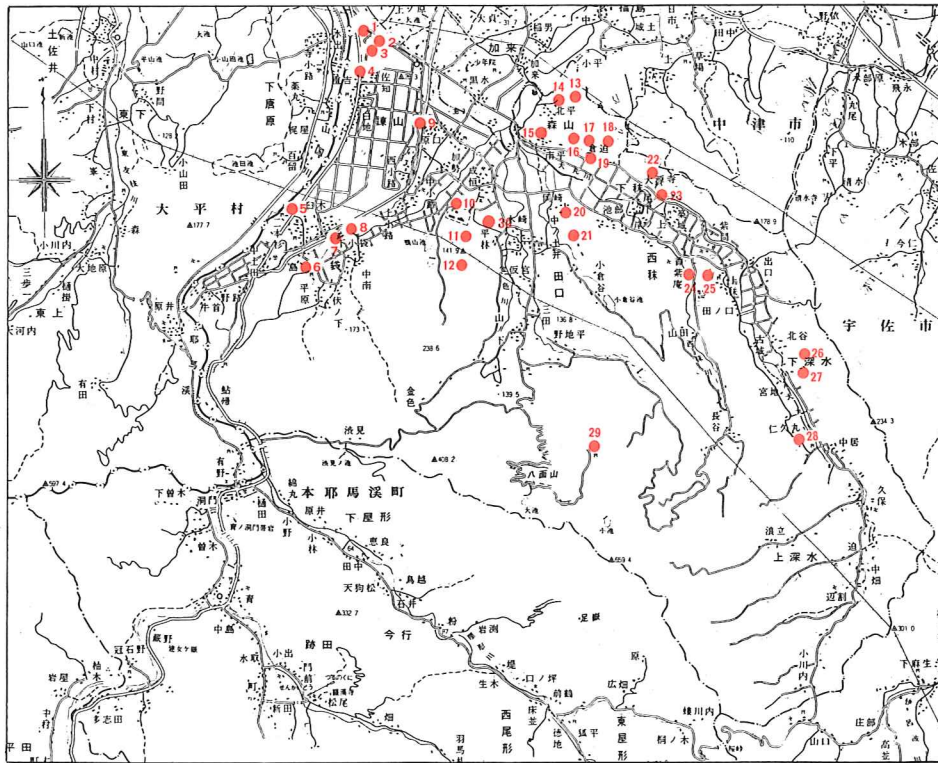
第1章 はじめに

三光村は福岡県との県境、大分県の北端部に位置し、北を中津市、東を宇佐市、南を本耶馬溪町に接している。村の西側には一級河川山国川が流れ、対岸に福岡県大平村がある。三光村の南側で本耶馬溪町との境にある八面山は、標高 659 m の頂上部が平たい台形型の山で、いろいろな方角から見ても同じ形に見えることから、その名がついている。八面山は古くから信仰の山として知られており、山頂の箭山神社周辺には、巨石信仰の跡がうかがえる。三光村は村の背後にそびえる八面山から派生する低い丘陵と、山国川・犬丸川によって運搬堆積された土砂によってできた平野部とで形成されており、遺跡の多くもこれらの地点に点在している。

本年度三光村では、昨年に引き続き総合グランド予定地の遺構確認、また近世墓群の調査を実施した。調査団の構成は下記のとおりである。

調査団の構成

調査主体者	三光村教育委員会
調査責任者	花崎貞雄（三光村教育長）
調査委員	賀川光夫（別府大学教授）
調査員	清水宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長） 植田由美（三光村教育委員会）
事務局	財方俊美（三光村教育委員会次長）
発掘作業員	藤野武志・清城玉美・上永紀代子・佐々木貞子・相良スナミ・相良トメ・相良ノブ子 高畑キョカ・川野ヨシ子・釘丸雪子・松尾初枝・清城君子・秋吉喜美枝・酒井キヨノ 前田千恵子・酒井勝代・神一子・楠木タカ子・中島喜美子
整理作業員	土橋厚子・乙咩里美・屋敷和子



第1図 三光村内遺跡分布図(1/100,000)

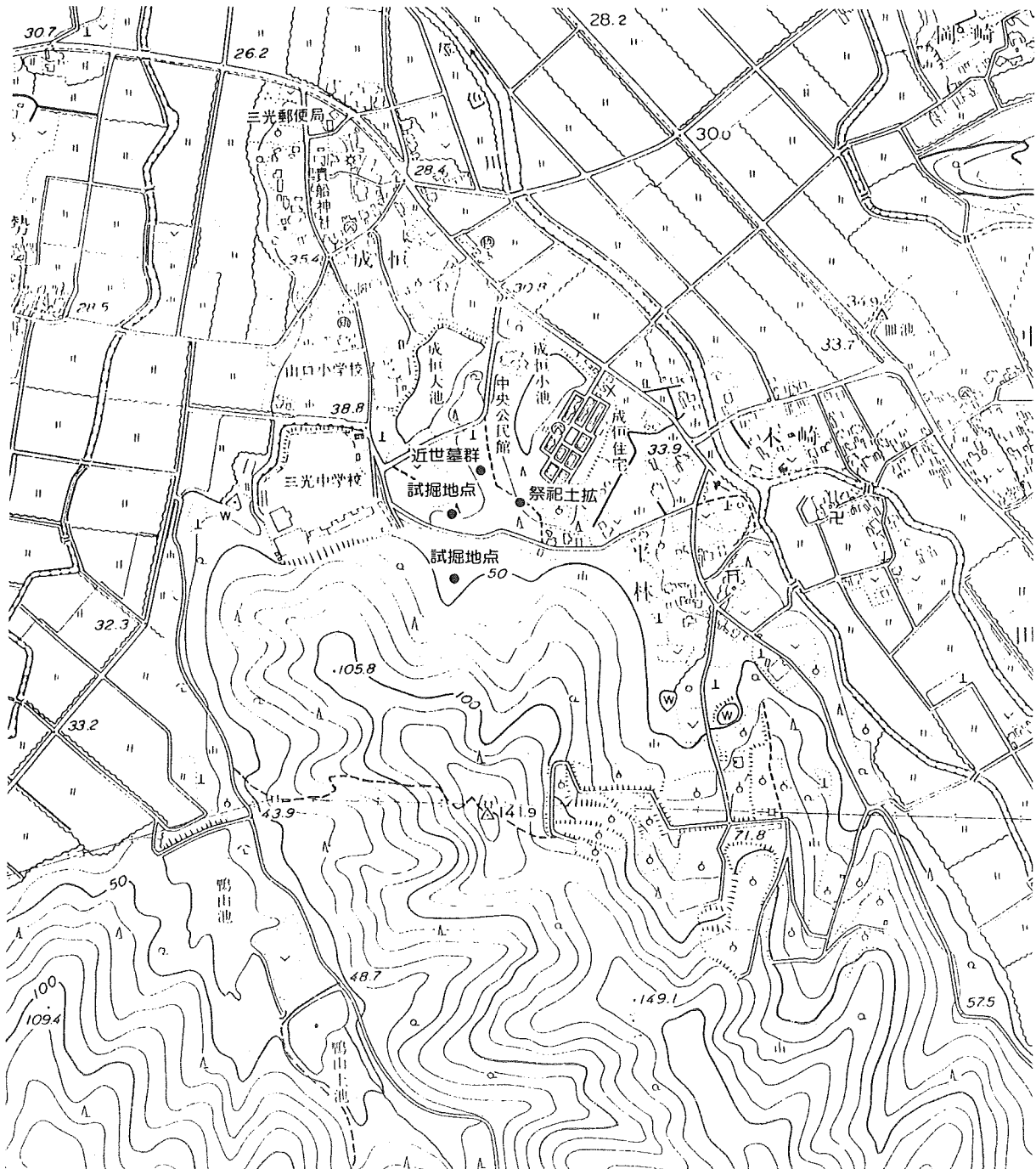
- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1. 上ノ原横穴墓群(横穴墓) | 16. 美濃尾遺跡(集落跡・散布地) |
| 2. 上ノ原遺跡(集落跡) | 17. 倉迫平遺跡(古墳・集落跡) |
| 3. 佐知久保畑遺跡(集落跡・散布地) | 18. 倉迫二ツ塚古墳(古墳) |
| 4. 佐知遺跡(集落跡・散布地) | 19. 野辺田横穴墓群(横穴墓) |
| 5. 城横穴墓群(横穴墓) | 20. 岡崎遺跡(散布地・土壇墓群) |
| 6. 外園遺跡(中世墓) | 21. 岡崎城跡(城跡) |
| 7. 白木古墳群(古墳) | 22. 三ツ塚古墳(古墳) |
| 8. 白木遺跡(散布地) | 23. 天神原横穴墓群(横穴墓) |
| 9. 諫山遺跡群(集落跡・土壇墓群・散布地) | 24. 塔ノ熊窯跡(窯跡) |
| 10. 成恒城跡(城跡) | 25. 塔ノ熊廃寺(寺跡) |
| 11. 庵ノ尾横穴墓群(横穴墓) | 26. ズリヤネ城跡(城跡) |
| 12. 鴨山横穴墓群(横穴墓) | 27. 深水邸埋納遺跡 |
| 13. 森山遺跡(集落跡・土壇墓群) | 28. 爰迫遺跡(地下式土坑) |
| 14. 北平横穴墓群(横穴墓) | 29. 八面山東部地区遺跡 |
| 15. 洗添横穴墓群(横穴墓) | 30. 成恒遺跡 |

第2章 調査の概要

成恒遺跡（三光村総合グラウンド予定地区）

調査地は村のほぼ中央、三光村大字成恒に位置する。調査は昨年から引き続いて行われ、昨年は開発地区全体の分布調査を行い、予定地北側に近世墓群が所在していることが確認された。また一部重機により試掘調査を実施した。

今年度は昨年の分布調査をもとにトレンチによる試掘調査と、近世墓群の調査等を行った。その結果ミニチュア土器が大量に検出される不定型の土坑が確認された。また開発予定地の東側には周知遺跡として、庵ノ尾横穴墓群があったため、横穴墓群の範囲の確認を行った。その結果、横穴墓は西側のグラウンド予定地には広がらないことが確認された。



第2図 調査地位置図(1/10000)

(1) 祭祀土坑(SK1)……第3図

この土坑は調査区のほぼ中央の丘陵上に位置する。標高は約43mを測り、周囲の平野部との比高差は約10mである。この土坑は、丘陵頂部からやや東側の斜面に位置し、東西幅約8m、南北幅約4m、深さは最も深いところで約1.5mを測る。土坑床面はほぼ平らである。土坑埋土は、上層は粗い地山の土で、下層になるにしたがって、キメの細かい土へと変わる。更に最下層部分では真砂土状の土となる。

SK1出土土器……第4.5図

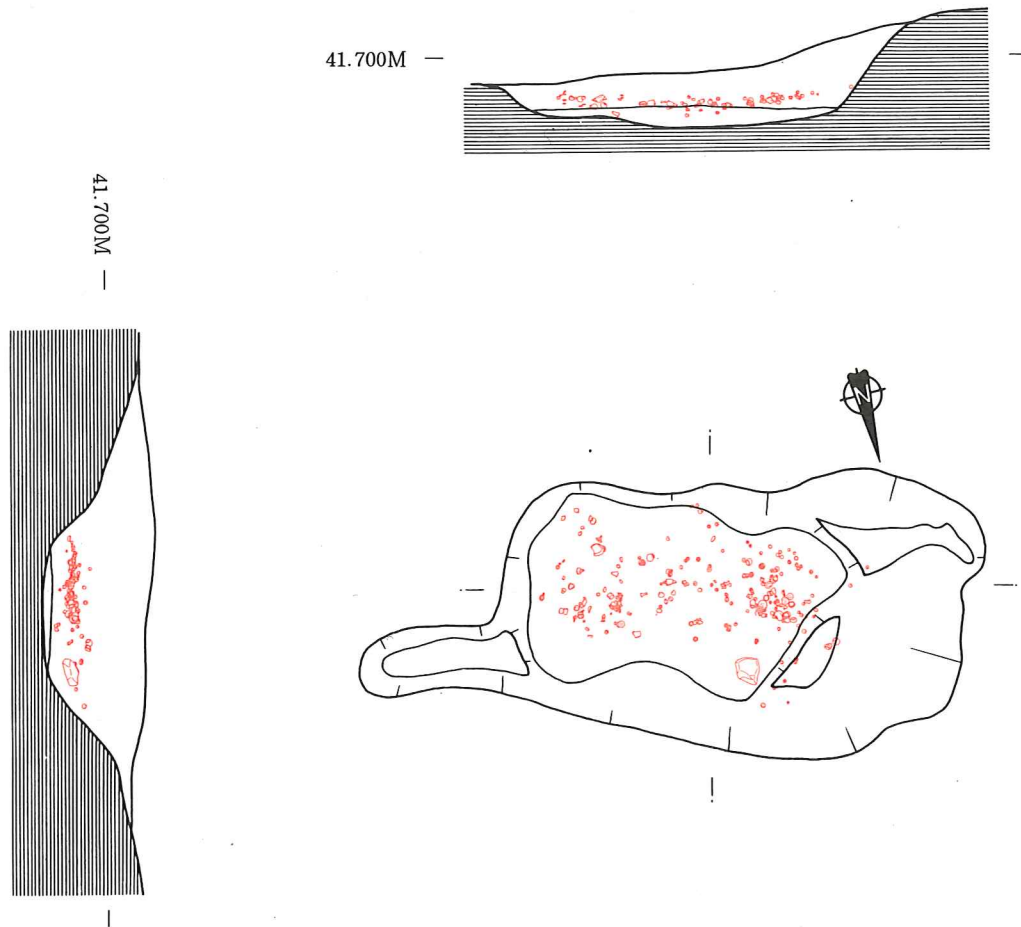
この土坑からは300点余りの土器が出土しているが、その大部分は手捏土器である。土器は一括して土坑へ埋納されたような状態で出土している。

第4図-1～4は椀のミニチュアである。1は口縁端部をわずかに外湾させる。5は二重口縁壺の口縁部分である。第4図6～19、第5図-1は小型壺である。12は口縁部内側に粘土の輪積み跡が見られる。第5図2～3は高坏の脚部である。

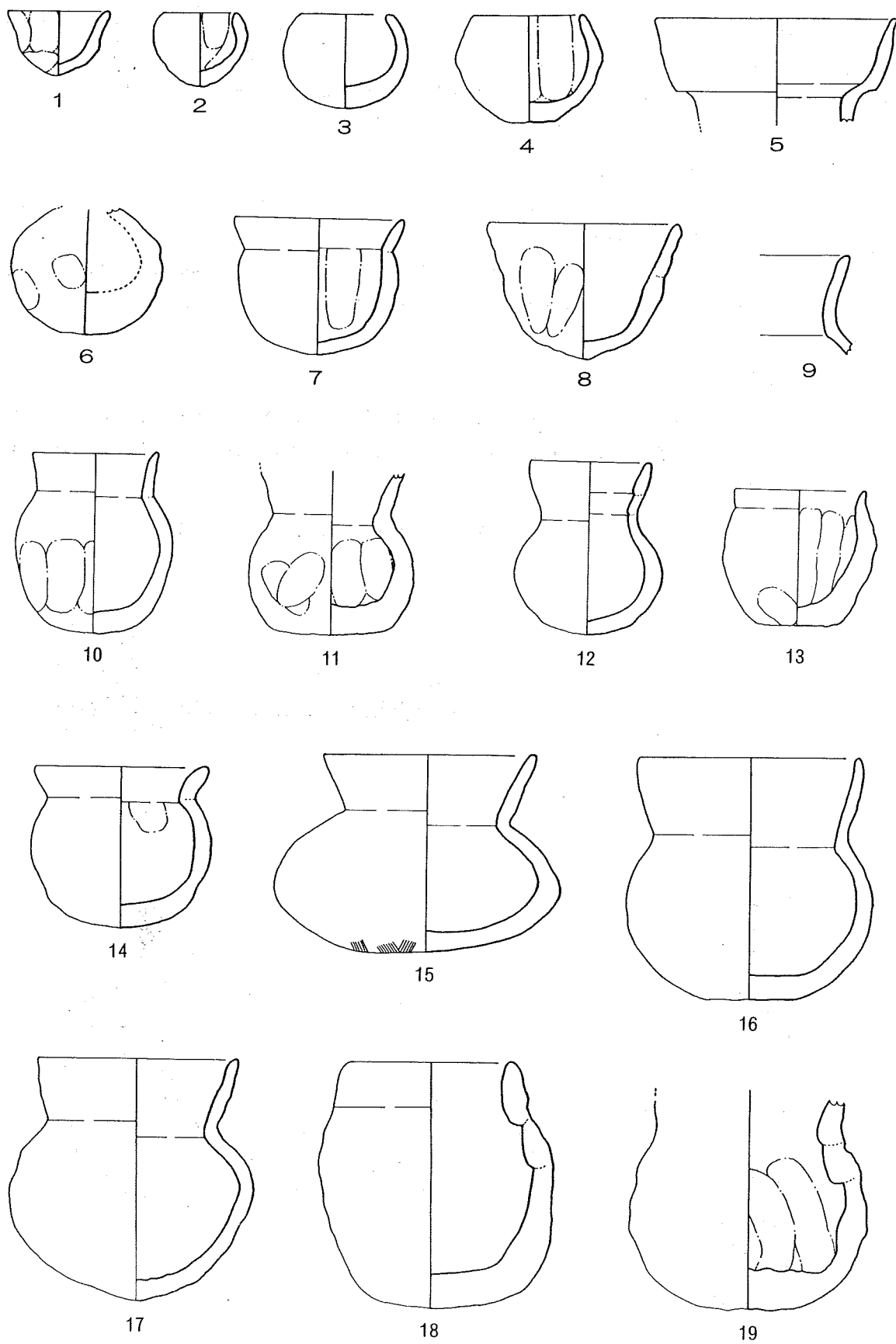
ま と め

この土坑からは約300点余りの土器が出土したが、いずれも非日常容器の小型の土器、手捏土器であった。この遺構の存在する丘陵上には他の遺構は確認されていない。出土土器等から何等かの祭祀を行った場所であった可能性も考えられる。

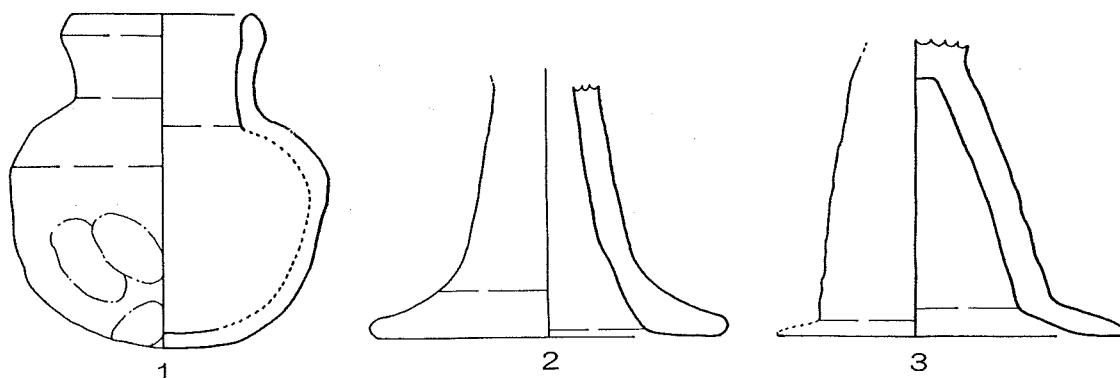
(参考文献) 日田市教育委員会「西有田赤ハゲ遺跡」『日田市埋蔵文化財調査報告書 第7集』1992年



第3図 SK1平・断面図(1/100)



第4図 SKI出土土器(1) (1/2)



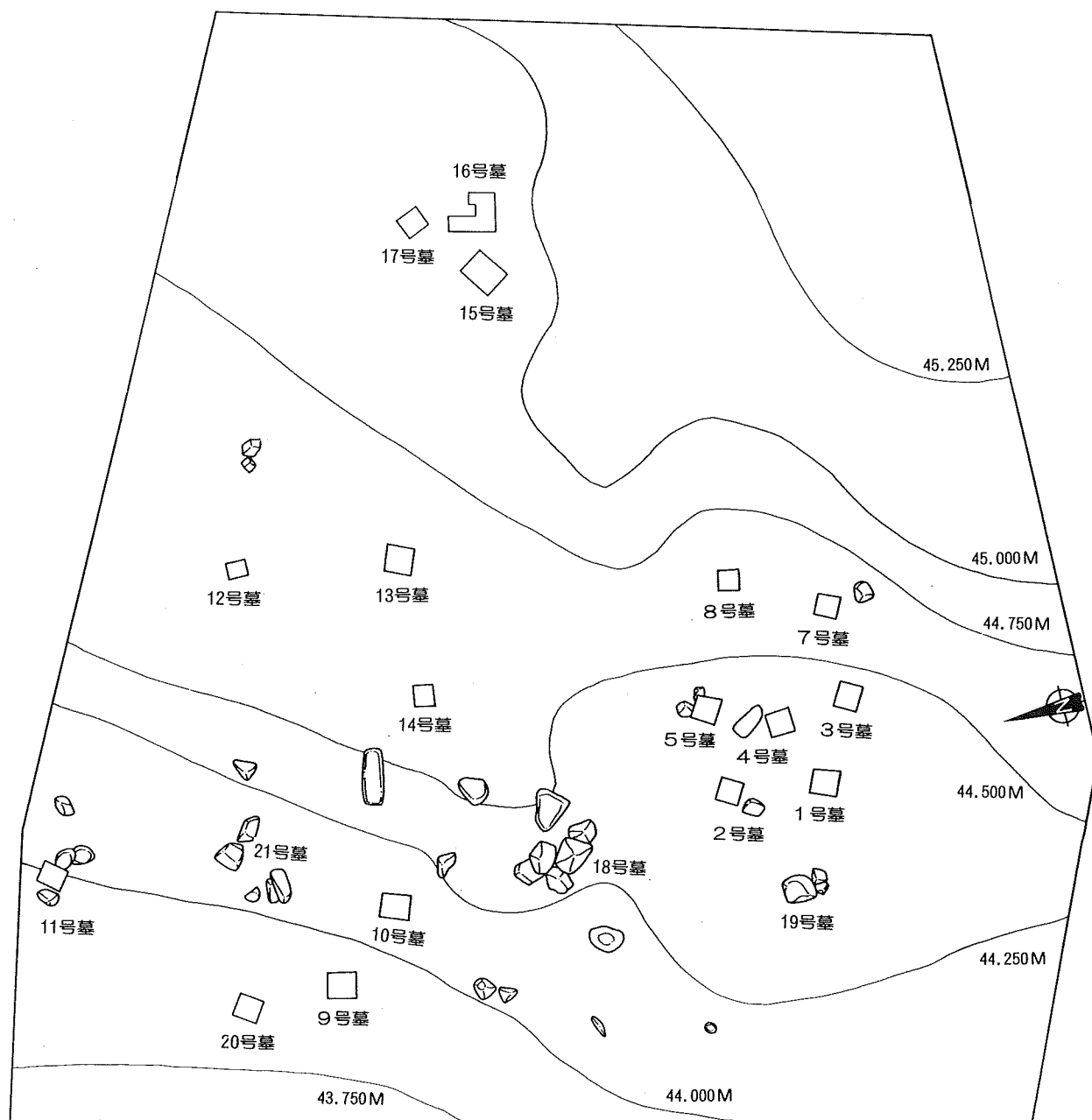
第5図 SKI出土土器(2) (1/2)

図版番号	器種	口径	底径	器高	色調	胎土	調整及び特徴
第4図-1	椀	3.4		2.2	黄赤褐色	石英・角せん石を含む	外面に指頭圧痕が残る。
第4図-2	椀	2.4		2.5	赤褐色	石英・角せん石を含む	内側に指頭圧痕が残る。
第4図-3	椀	3.1		3.1	黄赤褐色	角せん石・石英を含む	内外面共にナデ。
第4図-4	椀	4.7		3.6	黄赤褐色	ウンモ・石英・角せん石を含む	外面は指押さえの後ナデ。 内側は指頭圧痕が残る。
第4図-5	壺	8.2			黄褐色	角せん石・石英を含む	内外面共にナデ。
第4図-6	壺				赤茶褐色	石英を含む	外面に指頭圧痕が残る。
第4図-7	壺	5.8		4.6	黄赤茶褐色		内面は指頭圧痕が残る。口縁部と胴部の境目外面に粘土の継目が残る。
第4図-8	壺	6.4		4.6	灰赤褐色	石英を含む	外面の胴部に指頭圧痕が残る。口縁部と胴部の境目外面に粘土の輪積みの跡が残る。
第4図-9					暗褐色	石英・ウンモを含む	内外面共にナデ。
第4図-10	壺	4.2		6.1	黄茶褐色	ウンモ・石英・角せん石を含む	口縁部と胴部の境目外面に粘土の継目が残る。外面に指頭圧痕が残る。
第4図-11	壺				黄褐色	石英を含む	内外面共に指頭圧痕が残る。
第4図-12	壺	4.1		5.8	灰赤褐色	石英を含む	外面はナデ。口縁部内側に粘土の輪積みの跡が残る。
第4図-13	壺	4.5		4.6	黒褐色一部褐色	角せん石・石英・ウンモを含む	外面は指で押さえた後ナデ。内面は指で粘土を下から上へ引き上げ。口縁端部はつまみあげた後ナデ。
第4図-14	壺	5.7		5.4	黄赤茶褐色	角せん石を含む	内面は指頭圧痕が残る。口縁部と胴部の境目外面に粘土の継目が残る。
第4図-15	壺	7.3		6.6	赤茶褐色	石英・角せん石・ウンモを含む	内面はナデ。外面は口縁部は横ナデ 胴上部はハケ目調整の後ヘラみがき 胴下部は不定方向のハケ目。
第4図-16	壺	7.3		8.2	赤茶褐色	ウンモ・石英・角せん石を含む	内外面共にナデ。
第4図-17	壺	6.7		8.2	灰赤褐色	石英を含む	内外面共にナデ。
第4図-18	壺	5.5		8.3	黄赤茶褐色	ウンモを含む	内面に粘土の継目の跡が残る。
第4図-19	壺				外面-赤褐色、 内面-暗褐色	ウンモを含む	内面に粘土の継目の跡と指で下から上へ粘土を引き上げた跡が残る。
第5図-1	壺	4.8		8.7	黄赤茶褐色	石英・角せん石を含む	内外面共にナデ。 外面に一部指頭圧痕が残る。
第5図-2	高坏脚部		9.1		暗黄褐色	角せん石・石英を含む	内外面ナデ。
第5図-3	高坏脚部		9.2		黄茶褐色	角せん石・石英を含む	内外面共にナデ。

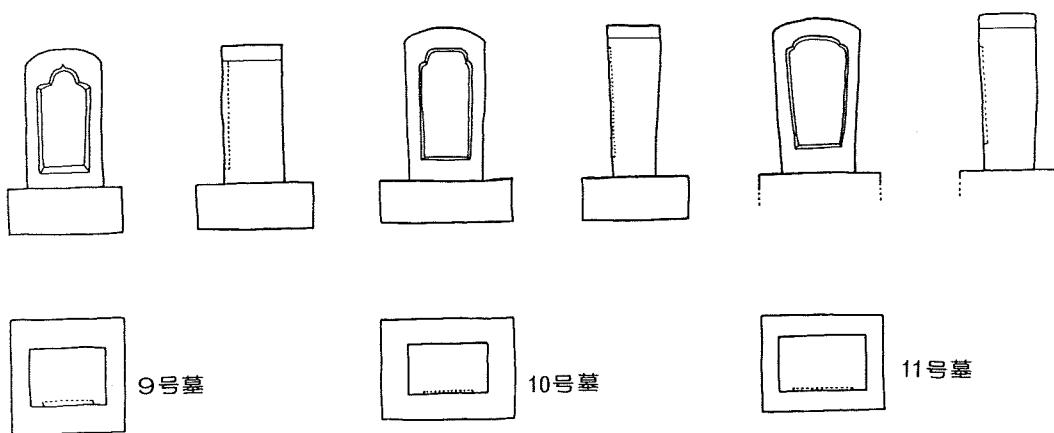
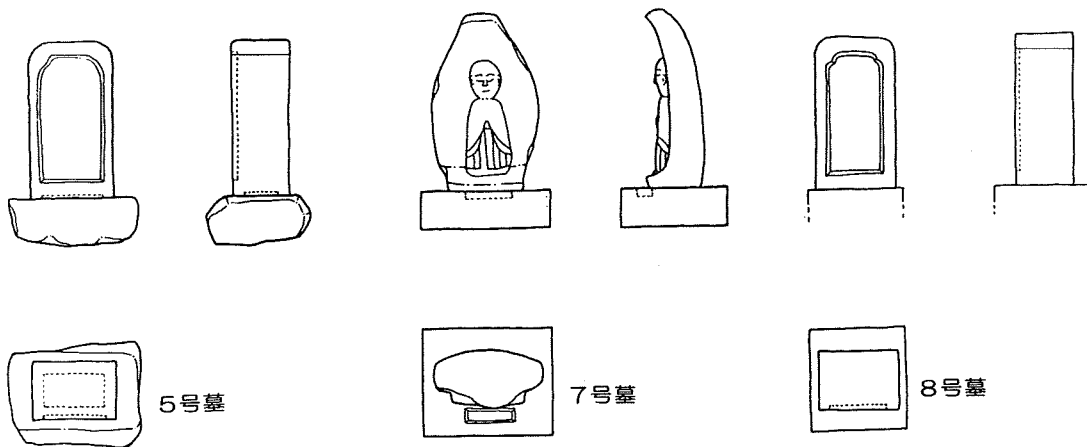
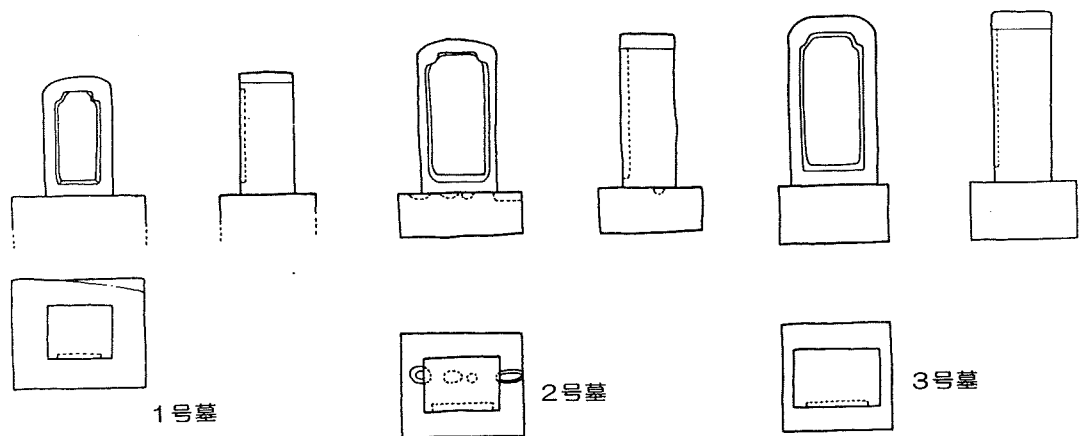
第1表 SKI出土土器 観察表

(2) 近世墓

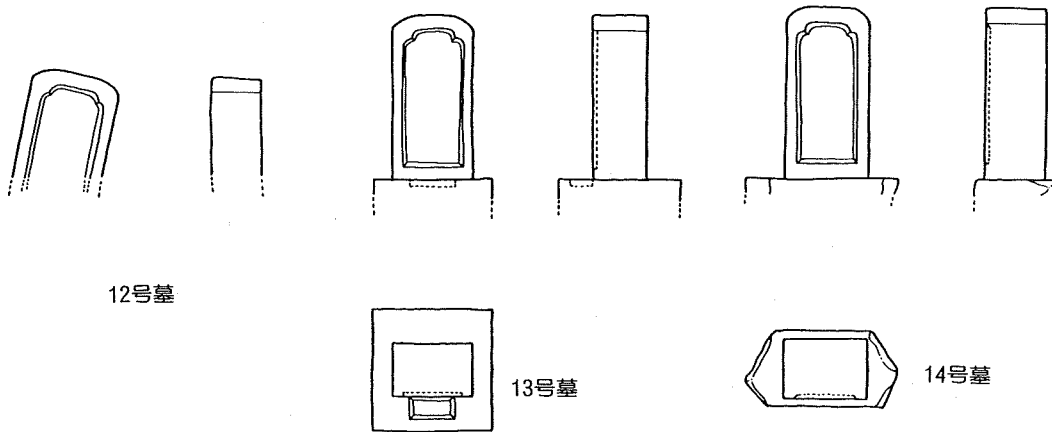
調査地区の中に近世墓地群が存在することは昨年の調査で確認されていた。そのため今年度は墓碑銘について調査を行った。墓石は全部で21基を数えるが、墓碑銘が記され、かつ年号が分かる墓石は11基であった。これらの墓のうち最も古い年号は享保十八年(1734)で、最も新しい年号は安政(1854～)であった。他には宝暦が2基、明和が1基、寛政が1基、文政が3基、天保が2基であった。ほとんどの墓石は頭部がかまぼこ状で、墓石の上部と下部の幅が同じ方柱形である。しかし最も古い11号墓については上部がわずかに広がる。



第6図 近世墓位置図(1/80)



第7图 近世墓 正·侧面图(1) (1/20)



第8図 近世墓正・側面図(2)(1/20)

番号	向	墓標
9号墓	左 正面 右	宝曆七□丑 积宗因 十月十五日
8号墓	左 正面 右	天保十二年 积尼□□ □□□十一日
7号墓	正面の右 正面の左	文政五カ年 八(六?)月十二日
5号墓	左 正面 右	文政二年 积尼妙永 名(?)六月十日
3号墓	正面	积□保
2号墓	左 正面 右	寛政五年 积□勝 丑三月廿七日
1号墓	左 正面 右	宝曆八月 积尼嘉 二月廿四日
14号墓	左 正面 右	天保十二年 积尼妙意 □ 七月三日
13号墓	左 正面 右	文政二年 积浄西 □十一月十六日
12号墓	左 正面 右	己 十月十六日 安政□ 积善□
11号墓	左 正面 右	享保十八丑 积妙西 正月十□日
10号墓	左 正面 右	明和六年 积□西 十二月廿二日

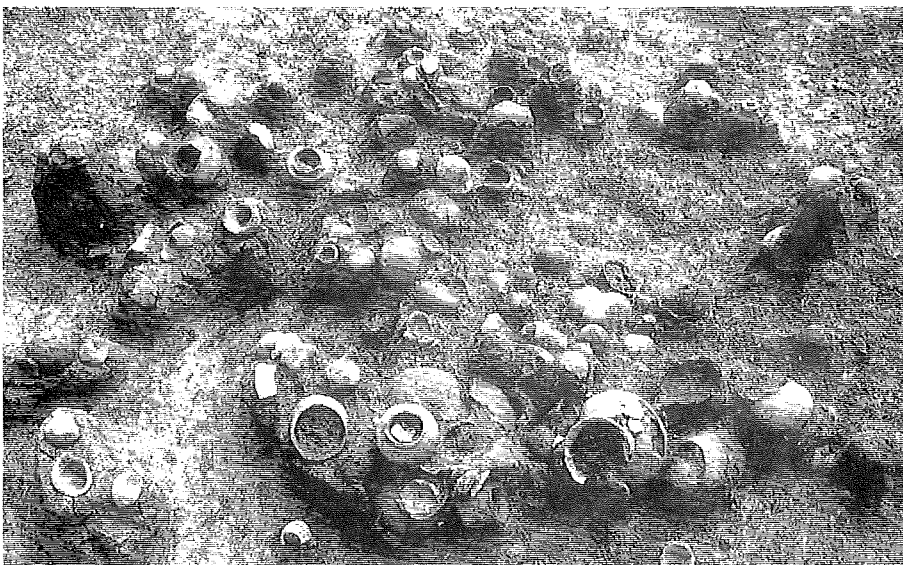
第2表 墓石銘文一覽表



成恒遺跡全景



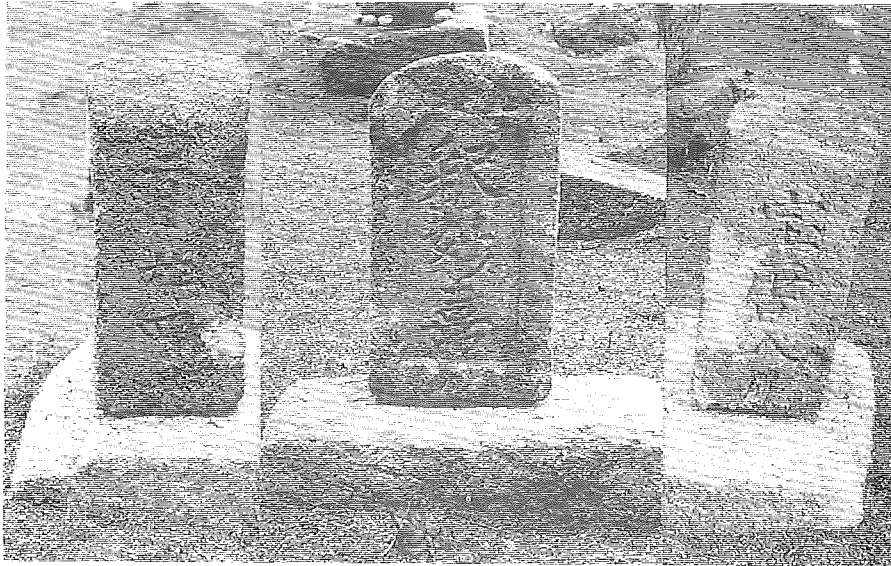
発掘風景



SKI土器出土状況



近世墓全景



1 号墓



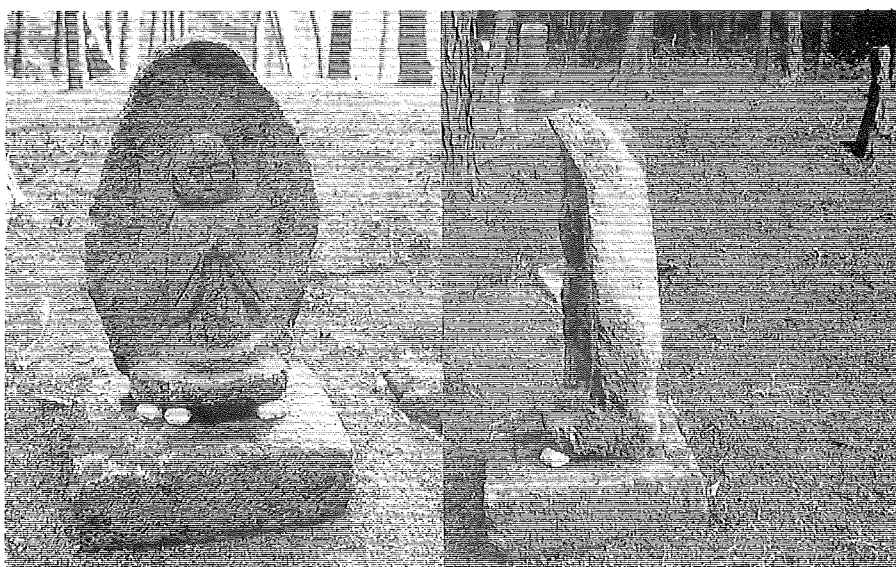
2 号墓



3 号 墓



5 号 墓



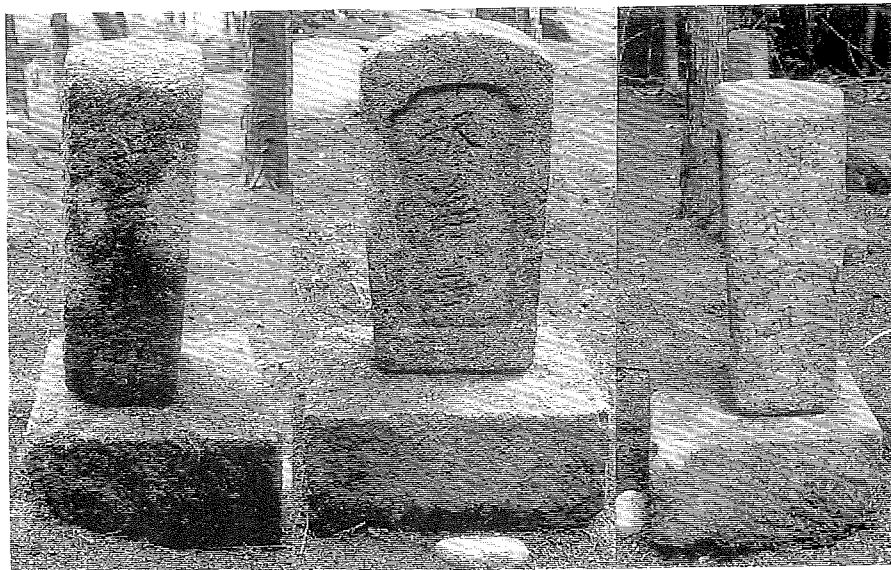
7 号 墓



8 号 墓



9 号 墓



10 号 墓



11 号 墓



13 号 墓

左側面

正 面

右側面

報告書抄録

フリガナ	サンコウチクイセキゲンハックツチ ヨウサガイホウ							
書名	三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三光地区遺跡群発掘調査概報							
シリーズ番号	Ⅳ							
編著者名	植田由美							
編集機関	三光村教育委員会							
所在地	大分県下毛郡三光村大字原口644-7							
発行年月日	1995年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積	調査原因
ナリツネ 成恒遺跡	サンコウムラオホアザナリツネ 三光村大字成恒					199408 ~ 199502	2,000 m ²	総合グラウンド 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
成恒		4世紀後半～ 5世紀前半 18～19世紀	土坑1基 近世墓 21基	小型丸底壺 ミニチュア土器		土坑から一括して小型の壺やミニチュア土器が300点余り出土		

三光地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ

1995年3月

発行／三光村教育委員会
(下毛郡三光村大字原口)

印刷／昭和堂印刷
